

183. 平成2年度滋賀県下における発掘調査の紹介 その2

13. 弥生時代中期・後期の方形周溝墓群

中主町八夫 小比江遺跡

遺跡は旧野洲川の微高地状に形成された小比江遺跡の東北隅の低湿地にあたる。調査は現在の水田面から約1.5m掘下げ、その間の断面観察から5～6回の旧地表面が検出でき、その1つに中世以降の水田面が検出できた。

検出された遺構は、弥生中期・後期の方形周溝墓群、木棺墓、古墳時代初頭の土坑・溝・条里溝、中世以降の畦畔、近世以降の井戸などがある。

方形周溝墓は弥生時代中期と後期のもので25基以上検出した。いずれも主体部は明確でなく、古墳時代初頭以降に削平を受けたものと思われる。周溝内から供献土器が20点ほど出土している。周溝墓は中期のものに溝を共有し連結するものが多い。また主軸が北方向の周溝墓が中期、北東方向のものが後期に大別できるが、トレンチ中央の旧河道より北東側の墓群は後期のもので、北軸方向である。この墓群より先線では周溝墓は検出されなかった。また、木棺墓は周溝を持たず、土坑内に埋設したもので長さ約166cm、幅約30cmを計る。小口は埋込み式のもので、底板はなく木質又は草状のものを敷いている。側板は125cmと55cmの板を2枚重ね



木棺墓

て継ぎ合せた特異なものである。また両側小口には幅5.6cm、長さ26cm、厚さ1.5cmの枕木状の材がすえられていた。木棺の主軸はN-10°-Eである。出土遺物は弥生後期の土器片が少々出土した。

上層の遺構では野洲郡条里8条7里の34坪と35坪の坪界溝、中世以降の畦畔、近世以降の井戸が検出された。

((財)滋賀県文化財保護協会 濱 修)

14. 階段式(竪穴系)横穴式石室を検出

蒲生町横山 天狗前古墳群

天狗前古墳群は蒲生町横山に所在する古墳群で、かつては20基以上が存在したといわれる。現在では、昭和37年名神高速道路建設の際に調査された6基の古墳を含め9基の古墳が確認されている。調査は蒲生野放策道建設に伴う確認調査で、当初より石室が露出していた古墳(7号墳)、新たに見つかった古墳(10号墳)の2基を調査した。

〈7号墳〉 径約20mの円墳と考えられる。内部主体は玄門部に階段状の施設をもつ横穴式石室である。全長約8m、羨道部長さ3m、幅1.1～1.3m、玄室は長さ約5m、幅1.9～2.2m、高さ2.5mを測る。羨道部と玄室床面は約1mの段差を測る。坏・高坏・壺などの須恵器が出土した。6世紀後半に築造され、6世紀末にかけて追葬が行われたと考えられる。

〈10号墳〉 径約15mの円墳と考えられる。内部主体は石室上部・羨道部を欠失しているが、7号墳同様階段式横穴式石室である。玄室は長さ4m、幅2.1mを測り、床面は敷石を施す。石材の積み方は7号墳とは違い、基底石を縦積みし、その上に小ぶりの石を丁寧に



7号墳(階段状積石部分)

積む。墳丘裾部には外護列石状の石列、埴輪列が認められた。石室内外より埴輪片、須恵器が出土した。6世紀中葉に築造され、後半にかけて追葬が行われたと考えられる。

玄門部に階段状の積石施設をもつ古墳は、上蚊野古墳群(秦荘町)、竜石山古墳群(安土町)など湖東地域に分布する。これら古墳の被葬者は渡来系氏族と想定されており、周辺の後期古墳群との関連なども考え合せ、今後の課題としたい。

(蒲生町教育委員会 斉藤博史)

15. 特別史跡安土城跡

安土町下豊浦 安土城跡

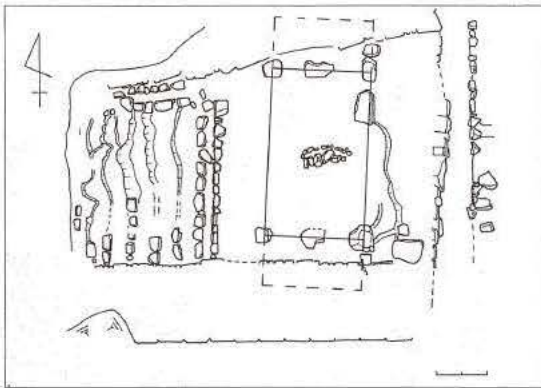
安土町と能登川町にまたがる安土城跡は、天正4年(1576)に織田信長の居城として築かれた、近世城郭の先駆的な城跡として知られている。

発掘調査は、平成元年度の伝羽柴秀吉邸跡の調査約3,000㎡に引き続き、今年度は伝羽柴邸跡の虎口部分、伝前田利家邸跡の西半分、大手道など約4,500㎡を対象として調査を行なった。

伝羽柴邸跡の虎口部分では、東西約15m、南北約10mの範囲から、櫓門跡と推定される遺構を検出した。礎石は径約1mの平坦で楕円形の石材7個と、石垣に添って寄掛柱を建てるための2石を合せた9個の石で構成されていた。門の両側には石垣が存在し、礎石の配置・瓦等の出土状況などから、上層に渡櫓をもつ櫓門であると推定される。門跡の後方には、7段の階段と、L字状に延びる石組溝が存在し、屋敷内へつづく。

伝前田邸跡では、数ヶ所において礎石が検出された。石組溝や武者溜まりと推定される区画、犬走り等、城郭の諸施設も検出されている。

大手道では、数ヶ所のトレンチを設定し調査を実施した結果、道幅は約9mで、山麓からはほぼ直線的に約100m延びていることが判明した。最上部のトレンチでは正面に石垣が認められ、大手道がここから西に向け



伝羽柴秀吉邸跡推定櫓門跡平面図(1/300)

て直角に曲がることが確認できた。また道の両側には、幅1~1.4mの石組側溝を伴っている。

出土遺物は、相対的に完形品が少ない。16世紀後半のものとしては、主に瓦類、瀬戸美濃・信楽等の陶器類や貿易陶磁器類、土師器等が出土しており、そのうち信楽焼播鉢、瀬戸美濃の皿などは、築城当時の特徴をよく示すものである。

調査の概要については以上であるが、今回検出した櫓門は日本城郭の先駆となるものであり、近世城郭の出発点は、安土城からであることを実証する資料と考えられる。(滋賀県教育委員会 坂田孝彦)

16. 北陸系土器が出土する竪穴住居跡群

能登川町垣見 垣見北遺跡

垣見北遺跡はJR能登川駅の東方にあり、今回の調査は現場整備に伴って行われたものである。全体で検出された遺構は、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡などで、出土した遺物は縄文土器・弥生土器・土師器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器の土器類、石鏃・砥石の石製品および刀子などの鉄製品である。

特に面的な拡がりをもって調査されたK区からは、弥生時代末期から古墳時代庄内期ごろの竪穴住居跡が10棟、10世紀から12世紀ごろの掘立柱建物跡が13棟まとまって検出された。前者については、当該地の南東にある同時期の集落跡中沢・斗西両遺跡との関係が興味深いほか、須恵器を出土させるものを含め11棟検出された竪穴住居跡の大半から、北陸系の土器が出土していることが注目される。これらの土器はいわゆる、「月影式」とよばれているもので、擬凹線でうめられた幅広の有段口縁をもつ甕をはじめ、同形態で擬凹線をもたない甕・有段口縁壺・高坏などが出土している。過去、町内遺跡からはごく微量の北陸系土器しか出土しておらず、今回のようにある程度まとまって出土した例は、町内はもとより湖東地方さらに滋賀県内でもあまり例がないのではなからうか。



掘立柱建物跡群と竪穴住居跡

一方、掘立柱建物は、その前半期総柱の大型建物が南方に、後半期庇付きの建物が北方に存在する傾向がある。また10世紀以前の掘立柱建物には、堅穴住居跡を切り込む、2間×4間の棟持柱付建物などがある。この遺跡の領域である大字垣見は、『和名抄』に記載された垣見郷に比定されており、これに関連する遺構である可能性が高いと考えられる。いずれにしても、昨年度の第1次調査結果も含めた研究・検討を待って、性格付けが行われる必要がある。

(能登川町教育委員会 山本一博)

17. 環濠集落と祭りの場を発掘

能登川町佐野 ^{斗西}遺跡

大字佐野から神郷にかけての斗西遺跡では、数次にわたる過去の調査で弥生時代後期～平安時代にかけての拠点集落の存在が明らかになったところである。隣接する中沢遺跡・法堂寺遺跡を含め、約28haにもおよぶ集落遺跡であるが、本年度はこの集落の南部域を約1.5haにわたって調査している。調査では百棟以上の堅穴住居跡、数十棟の掘立柱建物跡のほか、集落をめぐる環濠の一部が発掘された。環濠は幅20～50mにおよぶ自然河道を利用しており、護岸の杭列や河岸に沿った小溝などその利用の一端をうかがう遺構をともなっている。また、集落内部では住居跡群を小区画する幅2～3m、深さ1.5～2mの断面V字溝が検出されている。この溝は集落を囲む環濠を東西で結んでおり、集落内の単位集団を空間的に区画する小環濠とも言うべき性格のものである。

また、自然河道(大環濠)からは土器、木器等の遺物が多量に発掘された。中でもこれが大きく蛇行する地点の河岸では、約2m四方の範囲で、手づくね土器(300個以上)、石製模造品(9個)、高坏(約80個)が一括投棄されて発見された。高坏の形態などから、これらの遺物は4世紀末～5世紀初頭頃のものと思われる。手づくね土器や高坏が祭祀に使用される遺物であることは、かねてより指摘されたところであるが、当遺



現説風景(祭祀遺構を見る人々)

跡での出土状況や、個々の遺物の分析をとおして、古代の祭祀行為、とりわけ水辺の祭りの実態が解明できるのではないかと期待される。

(能登川町教育委員会 植田文雄)

18. 弥生後期～奈良時代の堅穴住居跡群

能登川町佐野 ^{中沢}遺跡

中沢遺跡は、能登川町大字佐野、種にまたがって存在し、鈴鹿山麓から西に流れる愛知川左岸の微高地に位置している。今回の調査は、町道敷設事業に伴う事前調査で約1,000㎡を対象に平成2年8月から実施した。

調査の結果、弥生時代後期から奈良時代にかけての堅穴住居跡を中心に、掘立柱建物、溝、土坑、ピット等が検出された。

堅穴住居跡は、ほぼ全域にわたって39基を確認し、平面プランは一辺約5.5～7mの隅丸方形のプランを呈しており、深さは残存状況が良いもので約60cmを測った。壁溝の残存も良好でほとんどの住居跡で認められた。また、作り付けカマドをもつ住居跡も4基確認され、うち1基は、当遺跡では今まで発見されなかった石組みで袖部を構築したものである。掘立柱建物は掘方が一辺約70～80cmで、4×2間以上のもので時期は不明である。

堅穴住居跡内からは、複合口縁をもつ壺、須恵器の坏蓋(7世紀前半)や布留式併行土器の一括遺物など、住居跡の年代を考えるうえでの良好な土器が出土している。

今回の調査で、堅穴住居跡が良好に残存していたことから、住居跡を構成する要素を検討するうえで貴重な資料となろう。

(能登川町教育委員会 西 邦和)



堅穴住居跡群検出状況(北側から)

19. 縄文晩期の合せ口甕棺墓が出土

米原町醒井 みきはら 三大寺遺跡

今回の発掘調査は町立醒井小学校の増築工事に先立ち、平成2年7月から11月まで実施したものである。

調査当初は白鳳時代寺院跡を検出することが目的であったが、調査の結果縄文時代から平安時代に至る複合遺跡であることが判明した。

縄文時代の遺構としては、合せ口甕棺墓が1基検出できた。甕は墓壇に対して横位に安置されており、やや斜位の状態で合わされていた。下方の甕は口径32.0cm、器高52.4cmを測り、口縁端部とやや屈曲する肩部に2条の刻目突帯を巡らせている。突帯の刻目は大きく横位の0字状を呈している。長原式に併行する時期のものと考えられる。上方に置かれた甕は早くに掘削を受け、底部から胴部にかけてのみ出土している。埋葬に際して上方の甕の底部を打ち欠いたと考えられ、底部のみ墓壇の側縁に置かれた状態で出土している。縄文時代については他にトレンチ全域から少量であるが石鏃、磨石、剥片などが出土している。

白鳳時代に関しては竪穴遺構が3棟検出できた。このうちの1棟からは炉を囲む状態で瓦が積み立てられていた。いずれも住居跡としては小形の竪穴である。寺院跡に関する遺構は今回検出できなかったが、調査区全域で多量の瓦片が出土している。軒丸瓦は外区外縁に三重園線がめぐる複弁八葉のもので、軒平瓦は四重弧文と扁行唐草文が認められた。

平安時代には集落が営まれていたようで、数棟分の掘立柱建物を検出した。遺物には緑釉、灰釉陶器、北宋銭「至和元宝」などが出土している。

(米原町教育委員会 中井 均)



合せ口甕棺の出土状況

20. 古墳時代前期の掘立柱建物集落跡

米原町入江西野 いへにしのみ 入江西野遺跡

本遺跡は、米原町入江西野に所在する、縄文時代か

ら古墳時代にかけての集落遺跡である。

この遺跡は、佐和山丘陵の一支丘が入江内湖に張り出した、標高85m前後の末端微高地上に立地している。

調査は、町道彦根・米原線建設に伴って実施したものであり、調査対象面積は約2,800㎡であった。また、排土処理や田の用水確保の問題があったため、便宜上、調査地を5ヵ所に区分けして行った。

今回確認された遺構は、柱穴・土坑・溝・柵列跡・掘立柱建物跡である。これらの大半は、出土遺物からみて、古墳時代前期に属するものと思われる。

また、今回の調査地において、当時の入江内湖の汀線部分が確認できた。汀線より内湖側には遺構が全く存在せず、通称スクモ層と言われている植物の腐蝕土層が厚く堆積していた。

この調査で、当地における当時の地理的環境の一端が明らかにされた事は、成果の一つと言えよう。

出土した遺物には、多量の古式土師器を始め、縄文式土器・弥生式土器・須恵器等の土器類や、打製石鏃・磨製石斧等の石器類、また、本遺跡の性格の一端を窺わせる土錘の存在が掲げられる。

この遺跡は、以前にも、矢倉川河川改修の際、近接地が調査されており、今回の調査は、その内容を追認した形となった。

前回の調査でも指摘されているが、水田跡や農具などの農耕に関するものが無きに等しい事と漁撈活動を予測させる土錘が存在する事とを併せて考えると、当遺跡が半農半漁の性格を持つ集落跡で、その生活基盤がある程度内湖に求められていたと考えられる。

(米原町教育委員会 土井一行)



調査II区遺構検出状況

21. 環濠集落内における低墳丘墓群の調査

近江町西円寺 さいまると 西円寺遺跡

県営は場整備事業に伴う調査として、近江町教育委員会では、西円寺遺跡の発掘調査を実施した。同遺跡はJR東海道線「米原駅」の北東約1.5kmに位置し、湖



環濠に接する第1号墓

北地域から北陸・東海・近畿方面に分岐する交通の要所にあたる。

遺跡の背後には丘陵がひかえ、東方に菜種川、北方に天野川を臨む。約6,500㎡の調査範囲からは、弥生時代後期から古墳時代中期に至る環濠集落跡の北端部の様相が明らかにされた。

集落北部を巡る環濠は、幅19m・深さ3mを前後する規模をもち、内部の集落遺構として、居住区を構成する竪穴住居（弥生時代後期）と、墓域区を構成する低墳丘墓（弥生時代終末期～古墳時代中期）の存在が明らかにされた。

竪穴住居は、鋭利な壁溝と土留杭列を残す方形プランのもので、住居壁面の構造を示す良好な資料となった。低墳丘墓は、環濠遺跡の内側に所在し、環濠に接して構築される。全容を明確にできたものは3基あり、第1号墓（円形・3世紀末）、第2号墓（方形・4世紀初）、第3号墓（帆立貝形・5世紀末）と続く。このうち第1号墓は、直径20～23mの歪んだ円形の平面を呈し、幅4～5m・深さ90cm～1m40cmの周溝によって区画される。また墳丘上には、幅2m・長さ6mの主体部掘方が残されていた。遺跡は古墳時代後期に菜種川の氾濫等によって埋没し、平安時代後期の土地開発によって遺構の重層関係を生み出している。

その他、近江町内では数多くの発掘調査が実施され、朝妻荘関連遺構（碓遺跡・奥松戸遺跡）や、顔戸遺跡群に伴う墓域（長門寺遺跡）が発見された。

（近江町教育委員会 宮崎幹也）

22. 古代集落跡

長浜市西上坂 大塚遺跡

今回の発掘調査は、彦根長浜都市計画道路事業に伴う事前調査で、調査対象面積約3,267㎡について全面調査を実施した。

大塚遺跡は、これまで古墳時代の集落跡として知られていたが、調査の結果、新たに弥生時代後期と飛鳥



移動式カマド出土状況

・白鳳時代の遺構を検出した。また、弥生時代中期の土器も出土し、付近に弥生時代中期の遺構が存在する可能性もでた。

弥生時代後期の遺構としては、竪穴式住居と溝がある。竪穴式住居は、旧河道に北側半分削られているものの南側の壁際にはほぼ完形のもので8点並んで出土し、床面直上でも2点、土坑内からも1点完形に近いものが出土した。溝は、幅約7mあるのに対し、深さは約1mしかなく浅い。水の流れた痕跡はほとんどない。集落を囲む溝の可能性もある。

飛鳥・白鳳時代の遺構としては、掘立柱建物跡である。周囲が所々かく乱されているため正確な規模は不明だが、桁行4間以上、梁間2間以上になると考えられる。

出土遺物の中で注目すべきは、移動式カマドの完形が出土したことだ。時期は古墳時代後期と考えられ、最大幅約53cm、器高約37cmを測る。左の把手のすぐ後ろに煙出しの突起をもつ。ススが附着している。遺構に伴うかは、今後の検討を要する。

大塚遺跡は、これまで道路工事による調査や、ゴルフ練習場の鉄柱の部分しか調査されていないため、遺跡の全容は不明な点が多い。今後の調査成果に期待したい。

（長浜市教育委員会 丸山雄二）

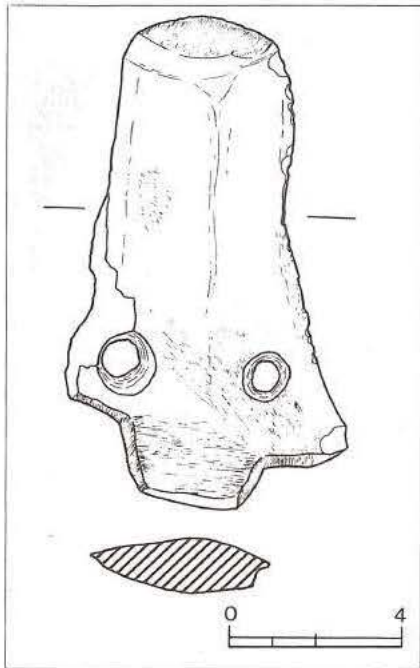
23. 中世水路発見

長浜市大戌亥 鴨田遺跡

鴨田遺跡は、長浜市大戌亥町に所在する。過去数回の調査で、弥生時代中期から後期にかけての拠点集落であることが判明している。

今回の調査は、都市計画街路3、4、7号下坂浜本庄線工事に伴い、1,500㎡を対象に実施した。調査区は8号線バイパス調査区（1970年、県調査）の北西50mのところに位置する。

遺構は、掘立柱建物5棟、竪穴式住居1棟を含む柱穴群、弥生時代後期の土坑1基、溝1条、中世の用水



石戈実測図

路3条とそれに伴う池状遺構3基である。これらの用水路、池状遺構は12世紀中葉、13世紀前葉、14世紀中葉に、段階的に西へ延長、再掘削され、徐々に水田が西へ拡大していったことがわかる。また、これらの用水路の先端部、坪境部に池状の遺構が作られることは他の用水路遺構にはない特徴である。これらの用水路の変遷は、条里地帯における中世の開発の具体的な過程を示す貴重な資料となろう。

また、弥生時代中期～古墳時代前期の河川跡から、ほぼ完形の石戈が出土した。石戈は河川が機能を停止する際に堆積した青灰色シルト質の埋土中から出土した。同層位からは、元屋敷式新相の高坏が出土しており、石戈は後世の流入と考えられ、時期は不明である。石戈は長さ11.3cm、最大幅6.7cmで刃部が著しく短く、先端部に再調整の痕跡がある。おそらくは、兵器として実用され、破損したものをさらに研ぎ直し再利用したものと考えられる。

今回の調査では、鴨田遺跡西限を確認するなど、多大の成果を得ることができた。

(長浜市教育委員会 橘田正徳)

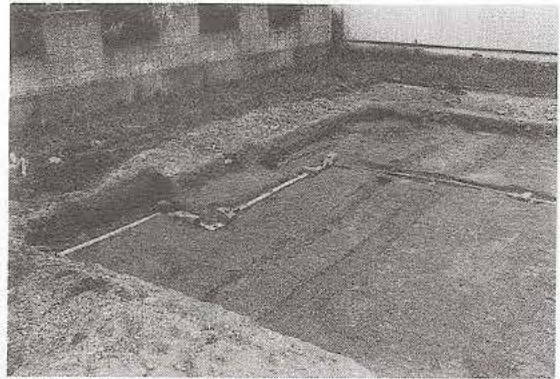
24. 江戸時代後期の竹樋

高島町勝野 おひまがはまの 大溝陣屋遺跡

大溝陣屋遺跡とは、JR湖西線近江高島駅一帯に広がる近世の陣屋遺跡である。天正6年(1578)に織田信長の甥にあたる織田信澄が、信長より高島郡が与え

路3条、池状遺構3基、16世紀代の土坑2基、弥生時代中期～古墳時代前期、弥生時代後期～古墳時代後期、古墳時代中期の河川跡を検出した。

これらの遺構の中で注目されるものは、中世の用水



竹樋施設検出状況

られそれまで高島郡の中心的役割をしていた新庄城から、新しく大溝城を築城したことによって城下が形成されている。以後城主は代々変って江戸時代に入って元和5年(1619)8月27日に北伊勢(三重県)の上野城主分部光信が45名の譜代家臣とともに大溝に入り大溝藩(2万石)の藩主となり陣屋を構える。

この陣屋は郭内かくちと呼ばれ、内部には北町通・中町通・南町通の通路があり武家屋敷区域を構成している。

しかし、明治維新後は郭内を中心とする陣屋部分が早くに農地化され一部宅地に利用されている状況で今まできている。

今回は、郭内の屋敷地であった所に調査を行う機会ができたその成果を記す。

調査区は、現状では田地となっている。耕作面を掘り下げると写真のような水道施設が検出された。この施設は、水源地が山ノ手(郭内の西に位置する)と呼ばれる谷間にあり、そこから石樋などを利用し郭内の各屋敷に引水されている。各屋敷には竹で樋を作り、樋と樋をつなぐのにマクラと呼ばれる松材で作った角材が用いられる。

この調査では、マクラの裏面に「文政十二己丑年新拵大工柏原たけエ門」の墨書が見られ、文政12年(1829)にこれらの施設が新しく作られたのではないかと見る資料が得られた。

これらの水道施設は、今日でもとゆ仲間や井戸仲間と呼ばれ、生きつづいている。

(高島町教育委員会 白井忠雄)